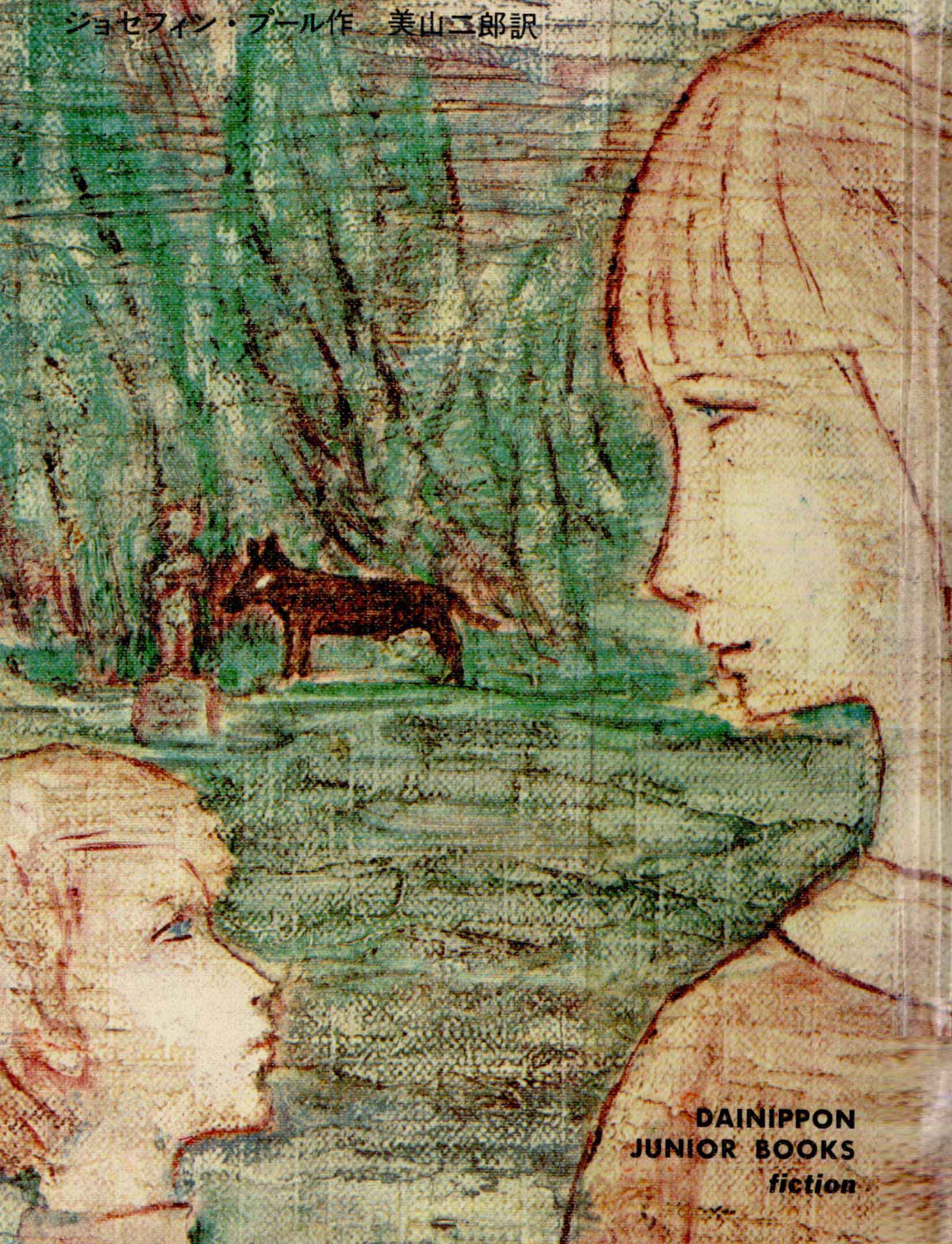


月明のひとみ

ジョセフィン・プール作 美山二郎訳



DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
fiction

大日本ジュニア・ブックス 〈フィクション〉

月明のひとみ

著者 ジョセフィン・プール
Josephine Poole

訳者 美山二郎

発行者 佐久間裕三

発行所 大日本図書株式会社

104 東京都中央区銀座 1-9-10

電話 (03) 561-8671~9

振替 東京 219 番

印刷所 株式会社 金羊社

製本所 株式会社 宮田製本所



8397-217653-4938

定価 680 円

1972年 2月29日 初版発行

● ^{み やま じ ろう} 美山二郎

1931年大連市（現在 中華人民共和国東北州旅大市）に生まれる。静岡県立浜松西高校を経て東京大学経済学部を卒業。「小説新潮」にショート・ショート、「宝石」（江戸川乱歩編集の推理小説雑誌）に推理小説を発表したことがある。

● ^{お がわ} 小川イチ

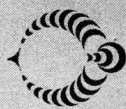
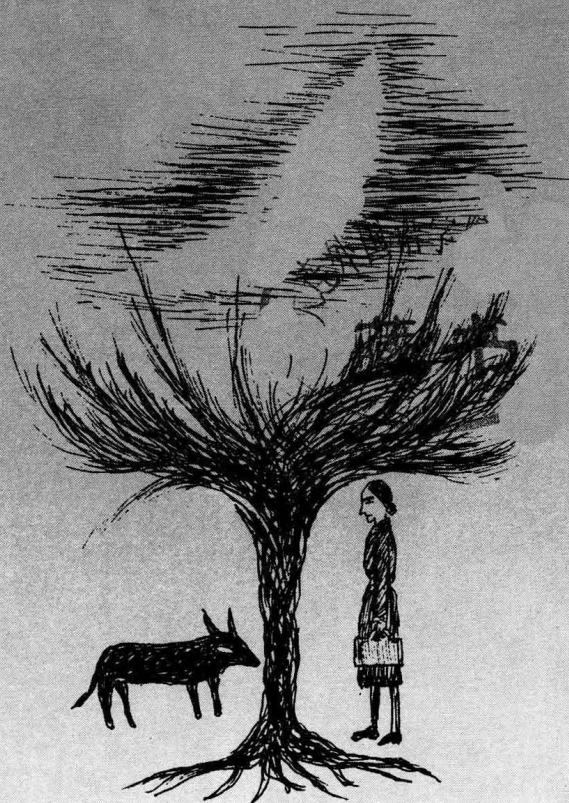
1922年千葉市生まれ。太平洋美術学校卒業。立軌会々員。安井賞候補新人展2回。

もし乱丁・落丁の本がお手もとに届きましたら、お手数でもご返送ください。取り替えさせていただきます。

月明のひとみ

ジョセフィン・プール作

美山二郎訳



DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
fiction

日本財団支援

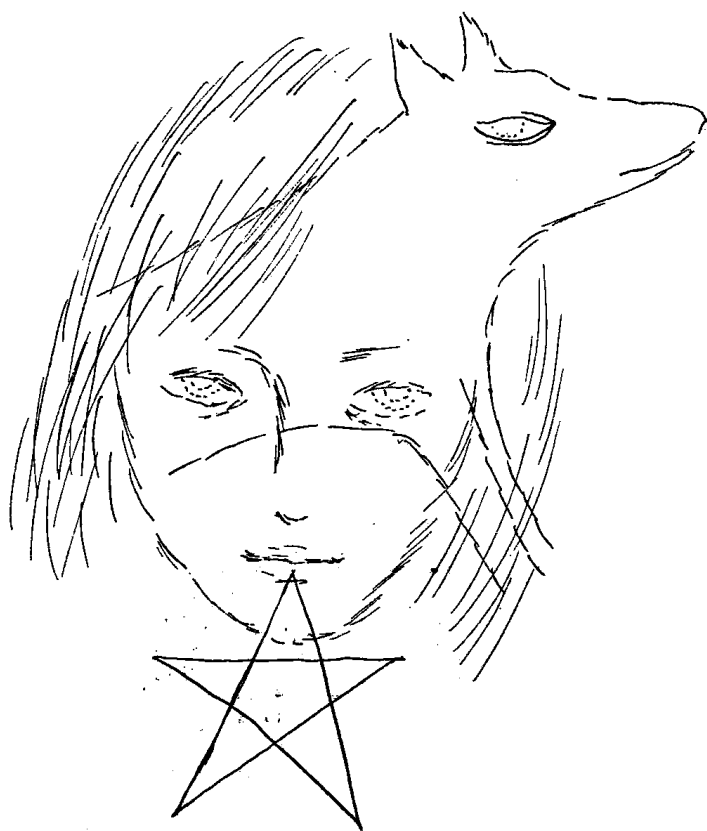
笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

月明^{げつめい}のひとみ

ジョセフィン・プール作

美山二郎訳
小川イチ装幀・画



もくじ

第一章

はじめに、われら待たん……

・ 7



第二章

つぎに、われら口笛くちぶえをふき……

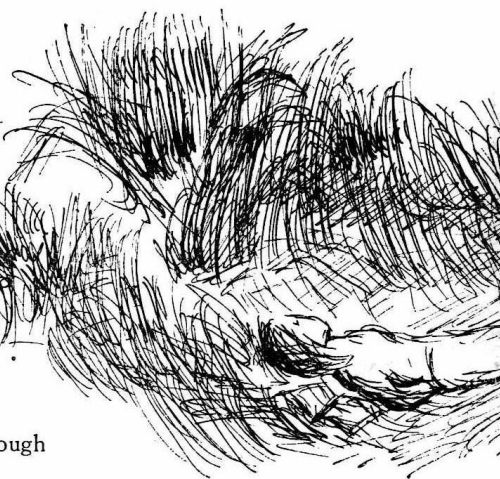
• 87

第三章

そして、われら、ともに踊おどらん

• 176

あとがき • 252



MOON EYES
by JOSEPHINE POOLE©

Japanese translation rights arranged through
Charles E. Tuttle Company Inc., Tokyo.

狂える者の声、森にあり。
生い茂る木々をつらぬき、
群れ飛ぶ鳥、縞なす木々の緑をも
踏みしだく……
狂える声。

犬どもを呼ばわん口笛、
また、森にあり。

しのぶがごとく走りくる犬。

カラスのごとく、黒き犬。

うずくまり、へつらわんがため……

犬どもの、月明のごとき、淡き目に。



はじめに、われら待たん……

あれは、いつのことだったか……。石でできたL字形をした灰色の家があった。村と森とのあいだを通る細い道に面して、家の名を圖案化してはめこんだ鉄の門があった。『ハースト・キャンバー』、森のある丘、という意味である。

門から急な石段をのぼりつめると、ふたまたになったじやり道になっていて、右に行けば玄関へ、左は家の裏口へつづいていた。

左手には裏庭があつて、果樹棚の果樹、アスパラガスやキイチゴなどが育っていた。だが、庭番のビアおじさんは、右手にあたる表の庭の手入れまでは手がまわらなかつたし、ビアおじさんは、うちの中の仕事でいそがしかった。

ながめをよくすることをたいせつに考えて、そのためにお金がかけられていたころには、庭は念入りに手入れされていたものだったが……。

そして、まるでやきもちをやいているかのように、がんじょうなブナのいけがきがびっしりと

庭をとりかこんでいて、外からは、ハースト・キャンバーの宝——このすばらしい庭をのぞき見することもできなかった。

建物は長くうしろのほうにのびていて、丘の中にまではいりこんでいた。つまり、うしろから見れば、一階の窓はぜんぜん見えなくて、二階の窓も、地面からほんの六十センチばかり上しか見えなかった。

晴れた日でも家の中は暗くて、下のへやからながめられるのはいけがきまでで、それ以上の見とおしはきかなかった。

そのため庭のじやり道も実際よりはせまく見え、夏は虫やほこりのにおいがたちこめ、冬になればこがらしが、いけがきの小枝や残った葉をざわざわゆすぶるのだった。

そこは、いりくんだまがりかどや、秘密の場所みたいなどころのいっぱいある、人のあまり知らない庭だった（もつとも、ビアおばさんの家だけは共有地のずつと上のほうにあつて、この家も庭もすつかり見おろすことができた）。

共有地の丘は、ハースト・キャンバーの土地のぎりぎりのところで、垂直にけずりとられていて、そのごつごつしたがけは、まゆをしかめておこっているようだった。しかし、下から見あげると、がけの上の草やキンポウゲのあざやかな色が、空との美しい境界線をえがいていた。

ケイトは、丘の上の雄牛たちが、がけから家の芝生や裏庭にとびおりてくるのをさまたげるも

のはなにもない、と思ったこともあった。でも、丘の斜面の共有地には、数頭の羊と、年老いた白い小さな馬が一頭いるだけで、雄牛は放牧されていなかった。

ハースト・キャンバーは、二百年このかた、ポーレイ家の屋敷になっていた。

ポーレイ氏は、一時は名の知れた画家だった。今でも全盛時代にロンドンのチェルシー街で買ったコールテンのズボンとビロードの上着をきてはいるものの、もう、ロンドンで展覧会をひらくことはなかった。

ポーレイ氏の妻は、ひとりの娘と、そのあとで男の子をひとりうんで死んでしまった。ポーレイ氏は絵をかこうとしても、今ではなかなかかかなくなっていた。

ポーレイ氏はこの庭の冬景色のような、茶色と灰色だけをつかった絵をかきはじめていた。ポーレイ氏が三年間もかけて一生の傑作となるべきその絵は、どんなふうにかいたものかと思ひやんで、いらいらしているときのほかは、希望にみちあふれて客間の三本あしの画架にのせて、麻のおおいをかけてあった。

やがて、いつになく長く、寒さのきびしい冬がきた。あわれなポーレイ氏は、丘にはさまれた家で、つぎの春までがまんしていられなくなった。

そこでポーレイ氏は、絵の道具とはきかえのくつしたを一足、圧縮した紙のスイツケースにつめこむと、子どもたちを呼んで、自分はどうしても旅行に行かなければならないのだといった。

「わたしたちはどうするの？」

と、ケイトがたずねた。

ポーレイ氏は、おまえは学校があるのだから、もちろんうちにいなくてはだめだ、といった。

「もう十五だから、わたしは学校をやめたっていいのよ。」

「おまえは、大学へ行きたいんだろう。」

ポーレイ氏はこまって、おでこをなでながらいった。かつてはふさふさとりり色にかがやいていた髪も、年とともににはげあがって、今では頭のうしろのほうに、ひとにぎりのたばが残っているだけだった。

「いいえ、行きたくなんかないわ。わたしを大学に行かせたいのは、おとうさんよ。」

「おまえは歴史家になりたいって、いつていたじゃないか。」

「歴史家になるために大学に行く必要はないわ。学校をやめて、人びとの生活を見たほうがいいのよ。」

「ばかなことをいうんじゃないよ。とにかくおまえたちはきちやいかん。じゃまになる。」

と、大きな声でいうと、ポーレイ氏はかきかけの絵のおおいをひきあげた。

「この絵をごらん。まだ完成していない。わたしが旅行に行かなくては、これは永久に完成しないのだよ。――」

わたしは、情熱をなくしてしまつたんだよ、ケイト。もう一度情熱をさがしださなくてはならないのだ。――

この春いっぱいだけでも家をはなれていれば、それがみつかると思う。

おまえがわたしをひきとめておけば、わたしは、役にもたないだめな人間になって、一生を終わってしまう……この、おそろしい、かきかけの絵のように。

こんなにむなしい気持ちになつたことはないんだ。」

ポーレイ氏は毛のうすい頭を両手でかかえてしまつた。

ケイトは、心からおとうさんを気のどくに思った。だが、おとうさんの芸術家氣質が、とほうもなくがんこなものであることも知っていた。

春まで旅行しようと、したくをすませたら、ぜったい行ってしまうこともわかつていた。

ケイトは、くどくどと考えるより、ぱつときめてしまつた。ちの子だったから、むだな議論などしなかつた。それに、芸術家の父をしんそこから尊敬していた。

景色のちがつたところに行くことは、芸術のために、とてもいいことでしょね、と、ケイトはけっきょくは同意してしまつた。それに、自分の思うままに家の中をきりまわすのも悪くはなとも考えたのだった。

つ出發するの?」

「あしたの午後エクスターゆきのバスがでるんだよ。ビアおばさんにたのんで、毎日きてもらうように約束してある。おまえがたのんで、おばさんに泊まってもらったっていいんだよ。喜んでひきうけてくれるよ。」

おまえが学校に行っているあいだは、おばさんがトーマスのめんどうをみてくれることになっているし、なんといつても、復活祭の休みがはじまるまでの、たった六週間だけのことだからね。春はもうすぐだよ。」

一月から二月にうつる、色をすいとられたようにどんよりと暗い空をながめながら、ポーレイ氏は、心から春を待ちのぞんでいるようにいった。

「なぜ、もっと早くいつてくださらなかったの？」

「いつまでも、あまだこうだと、いいあうのがいやだったからさ。」

と、いったきり、それ以上ポーレイ氏は旅行についてふれようとしなかった。

こうして、ポーレイ氏は翌日の午後出発し、ふたりの子どもだけが家にとり残された。

はじめのうちは夜になると、家がばかに広く、寒く、ひっそりと静まりかえっているように思えた。

三日間、野獣のようにあらあらしく、風が谷間をふきあれた。

青い牧場に、風がいくすじもいくすじも、黒く長い影をつくってかけめぐった。まるで、草の

下から牧場のまがった背骨があらわれたような感じだった。風はまた森にふきこんで、木々を茶と緑の旗のようにはためかし、あたりの景色全体をゆり動かしていた。そして、鉛色の空を走り飛ぶ雲の影がレースのような模様を地面にえがいた。

夜になると、森に近い家は巨人の手のひらに乗せられて、大きな指先でドアや窓をノックされているように、ぐらぐらゆれ、ガタピシ鳴った。家の板という板がキークーきしみ声をあげ、大きな古い煙突の中のれんががゆるんで落ちた。

昼間はふきあがる風をわくわくして見ている、夜は、ケイトもトーマスも、とても窓の外を見る気になれなかった。家がしっかりと根をおろしているはずの庭からふきあげられて、どこまでもはてしなくかけめぐる大気の中に高くふきとばされていくような気がした。

ピアおばさんも、こんな強い風はじめてだといった。

それでもある日、セント・アイブスからきれいな絵はがきがきた。それには、ポーレイ氏は元気にやっていると書いてあった。

それから復活祭がきて、やっと春になった。

ケイトは、サ克蘭ボの木の下はやわらかい草の上にねそべって、長い芝生のあいだにほころびる花をかぞえていた。

「パセリ、クローバー、ハコベ、ワスレナグサ——」

空はまっさおに晴れあがって、雲ひとつなかった。

ケイトが歌をうたうと、カッコウがないた。家の黄色いネコが、へいの上をのっしのっしと歩いて、ビロードのようなつまさきからセメントの粉をばらばらと落とした。ネコの忍者のようなタイトスーツは、太陽の光をうけて、キンポウゲの花みたいにかがやいていた。

「タンポポ、キンポウゲ、クサノオウ、それからヒナギク、ヤエムグラ、それにタネツクバナ……。」

ふと、ケイトはへんな音に気づいた。うつろな鼻歌のような音だった。どこからともなく聞こえてきたのだが、庭じゅうのものすべて、草の葉の一まい一まいまでが、奇妙に反響して身ぶるいをしたようだった。

それは、とくにケイトをぎょっとさせたり、びっくりさせたりするほど大きな音ではなかったけれど、黄色のネコはほんとうにおどろいたらしく、なんともいえないふしぎなふるまいをした。耳をふせ、しっぽをまっすぐにのばして、へいからとびおりました。そして、犬にでも追いかけられているように、家の中へ逃げこんでしまった。

ふだんはおとなしくて、ぎょうぎのいい、おちついたネコなのに、このときばかりはサクランボの木の下にねそべっているケイトが、目にもはいらなかったらしく、背中をのりこえて、あつというまに走り去ってしまった。

ケイトは休みのあいだに、『老水夫』^{注1}を読んでいくことになっていた。ケイトはからだの下じきになっていた本をひっぱりだした。

本は、草のしみがついて、しわくちゃになっていた。

——くる日も　くる日も、

風もなく　船は動かず、

えがかれた船のごとく

えがかれた海にとどまる。――

ケイトは、あおむけになって目をとじた。

この詩は、この年の復活祭^{ふっかつさい}の休みのケイトの気分を、そのままあらわしていた。

晴れわたつてはいるが暑^{あつ}すぎもせず、あらゆるものがはれやかにかがやいていた。

金色にはえる庭^{にわ}で、ケイトは詩の光景^{こうけい}を頭にえがいた。

——えがかれた船のごとく

えがかれた海にとどまる。――

庭^{にわ}は、まさにこの詩^しのとおりだった。いけがぎとがけにはさまれた、手入れのゆきとどいた庭^{にわ}の小さな部分^{ぶぶん}。雲ひとつない春の空でふたをした、美しい花の箱^{はこ}の中にいるようだった。